

「闇の中を歩む民は、大いに光を見、死の陰の地に住む者の上に、光が輝いた(イザヤ 9:1)」。神の救いの光は輝く。闇の中を歩む者にも、死の陰の地にある者にも。

幼かろうと、老いていようと、生命が溢れていようと、死んでいようと、神の光は生と死の隅々を照らす。そして光は、争いから人間を解放(9:3~4)。

微であり力でもあるその光は、「ひとりのみどりごが生まれた(9:5)」出来事だと。

イザヤの預言は七百年後、洗礼者ヨハネの誕生に際して父ザカリアによってくり返される。「暗闇と死の陰に座している者たちを照らし、我らの歩みを平和の道に導く(ルカ 1:79)」。

ヨハネとイエスは、母の胎にある時から響き合っていた(ルカ 1:41~42)。ザカリアの預言は、息子ヨハネにも語りかけられる。

「幼子よ、お前はいと高き方の預言者と呼ばれる。主に先だって行き、その道を整え、主の民に罪の赦しによる救いを知らせるから(1:76~77)」。

とはいえ、生まれて間もない嬰兒(1:59)には解るまいが。

天使から妻の懐妊を告げられた時(1:13~17)、ザカリアはそんなバカな(1:18)と信じず、そのために口が利けなくなった(1:22)。幾らか裁きの調子もあるが(1:20)、口が利けないことは懲罰ではなく、「沈黙」という御言葉の充溢ではないか。その後、ザカリアが預言を発するのための備えではなかったか。

世の諸々を判断する私たちの思考は、ほとんど相対的になされる。個性や能力、性格や寿命、労働や経済力、人間づきあいや社会的地位、時間や運まで、他との位置関係で自身を計量し、他者を計測する。神の圧倒的な御言葉を前に、こうした相対的な人間の言葉は喪失させられる。

さすれば沈黙は恵みではないのか。沈黙、口が閉じられ、思考が閉じられ、心が空っぽになる状態。騒がしい私という器が空になって、御言葉を受け入れる備えができる。

沈黙と御言葉の充溢が、新たな扉を開く。

数か月沈黙していたザカリアが、天使が命名した「ヨハネ」の名を示すと(1:63)、「すると、たちまちザカリアは口が開き、舌がほどけ、神を賛美し始めた(1:64)」。

神の讚美は沈黙から生ずる。そしてザカリアは聖霊に満たされて預言し(1:67)、「神の憐れみの心、あけぼのの光の訪れ(1:78)」を告げ、「暗闇と死の陰に座している者たちを照らし、我らの歩みを平和の道に導く(1:79)」と預言は結ばれる。

預言とは何であろうか。私たちはそれを聞くだけなのか。狭義には、神の言葉を「預かった」預言者がこの役を果たす。しかし広義には、私たちもまたキリストという御言葉を「預かり」、その愛をこの身に覚え、自ら表明する。

それは「『靈』も弱い私たちを助けてくださる。わたしたちはどう祈るべきかを知らないが『靈』自らが、言葉に表せないうめきをもって執り成してくださる(マ 8:26)」ことではないのか。

私たちは『靈』のうめきをこの胸に迎えて、沈黙し、淡々と表明していく。

一人ひとりの祈りと沈黙に御言葉は到来し、充溢し、八ヶ岳伝道所の、諸教会の「預言」となって「昔から聖なる預言者の口を通して語られたとおり(ルカ 1:70)」の現実を起こす。つまり「闇の中を歩む者、死の陰の地に住む者(イザヤ 9:1)」に光が輝く。

それだけではない。武力もことごとく焼き尽くされる(9:4)。パレスチナに、シリアに、ミャンマーに、沖縄にある軍備は必ずや焼き尽くされるだろう。



《おまけのひとつ》

沈黙は水甕 御言葉を貯め やがて溢れ出すまで待てるか 途中でひっくり返してもいいだろう 渇く者には今必要なこともある 甕は大きくなくていい ただ掌に岩清水を掬うくらいは待ちたい